

3.11 ソレカラ

～障害者・
福祉職員の
「あの日」と
「ソレカラ」～

- ◎ 渡辺征二さん(男性/当時70歳・聴覚障害)
- ◎ 渡辺さんの奥様(女性/一緒にお話に参加していただきました)

発災時の状況を写真や絵画として残した。 震災の教訓として、孫に代々受け継いでほしい。



— 渡辺征二さん —



— 孫の安否が分からず心配する渡辺さん —

仮設住宅

近隣住民との交流が難しく、慣れない環境の中での仮設住宅暮らしが続く。

5月になると、名取市に応急仮設住宅が完成したため、渡辺さん夫婦は仮設住宅に引っ越すことになりました。仮設住宅の暮らしで一番困ったのは、近隣とのコミュニケーションです。震災前は近隣の方が渡辺さんの耳の状態を知っていたので、身振り手振りや筆談で交流することができていました。しかし、仮設住宅では渡辺さんのことを知る人はおらず、スムーズにコミュニケーションを取ることが難しくなってしまったのです。他にも、仮設住宅は断熱性能が低いため、夏は暑く冬は寒いなど、室内の寒暖の差が激しいところにも困難を感じています。

新生活

内陸部への移転を決意。防災の備えを忘れず、新生活への準備を進める。

渡辺さんは現在も仮設住宅に暮らしていますが、間もなく閉鎖されるのを機に新生活を始める予定です。閉上のかさ上げ地区に戻るか、内陸部に移るか悩みましたが、息子と相談して内陸部に移ることを決意しました。生まれ育った閉上は慣れ親しんだ場所であり、友人知人もたくさんいましたが、自身の耳の状態もあるため、より一層安心して暮らせる場所を選ぶことにしました。渡辺さんは当時のことを教訓に、安全な場所での新生活でも防災の備えを忘れずに暮らしたいと話しています。

記録

発災時の写真や自身の気持ちを絵画で表現。全国で展示が行われる。

震災前から、渡辺さんは趣味として絵を描いたり写真を撮ったりすることを楽しんでいました。その趣味を活かして、震災の時の記憶を絵画や写真に残し、ファイルにして保存しています。この記録を孫に託し、代々受け継いでほしいと考えています。

たとえば、ファイルの中には孫が通っていた学校の写真があります。「これを撮った時は、“孫を学校に迎えに行かなければ!”と焦っていた」「この時、雪が降って気温も下がって寒くて、ゴミ袋に穴を空けてかぶり暖をとっていた」などと、1枚の写真からさまざまな記憶が呼び起されます。また、「孫を迎えに行かなければと思っていた時、兄に“津波に飲まれるからダメだ!”と叱責された」時の気持ちを絵画として表現し、記録として残しました。これらは「孫のために」と集めてきたものですが、当時の聴覚障害者の状況を知る貴重な資料であるとして、東京、大阪、神戸、徳島等で展示され、反響を得ています。

震災が起きてからこれまでのことを振り返り、渡辺さんは健常者に伝えたいと思うことがあります。それは、どんな方法でもいいから聴覚障害者とコミュニケーションを取ってほしい、ということです。「筆談でもいいし、手のひらに文字を書いたり、地面に書いたっていい。表情を変えたり身振りを入れてもらうだけでも分かるんです。そういったお手伝いを、ぜひして欲しいと思います」と渡辺さん。情報不足に陥りやすい聴覚障害者のために、互いの積極的な交流を望んでいます。